

松 風

## 【特別掲載】大友啓治居士の投稿録



### 新年の抱負（第2号 昭和57年4月23日）

一日一炷香と最初に揚げたら、他に書くことが無くなった。

いろいろ決意もありましたが畢竟この語に尽きてしまう。

最初この語を聞いたときは一日一回の静坐なぞ苦もないと思った。ところが日に日にむずかしい、遠い道程と感じるようになった。

禅は一生の事、先人の言葉にある通り、ここは一番だまされたって良い、喧嘩腰でやってやろうじゃないか。一度線香に火をつけたなら、火の消えるまで坐り抜こうじゃないか。いつか本当の一日一炷香の妙味に徹することが出来ると信じて、一日一日を大切に瞬間瞬間を生き生きと行じてゆこう。とかく一人の力というものは魔が差しやすい。「禅と茶の集い」の皆さん、今年こそ大死一番一緒にやっけてゆこうではありませんか。

### 禅とのつきあい（第3号 昭和57年11月23日）

先日高校の同期会があった。3年間の全寮生活で寝食を伴にただけあって結びつきも一般高校生のそれよりも深い気がする。そんな3年間で室友は殊に自分の生き方に大きな影響を持って来る。

そんな一人に渡部君がいた。当時彼はなかなかの秀才で勉強嫌いの自分には寄りつき難かったが、化学好きで部屋でワインを作り始めたことで一遍に気に入りに以後親しく付き合うようになる。

彼が一日、一冊の本を読みふけていた。「ポパイ、何読んでんだ。」ちなみポパイは彼の渾名で力が信じらぬ程強かった。それには何も答えず、次の週になると茶碗と抹茶を帰省の折に持ち帰り、自分の机で、カシャカシャ始めたのである。私はこいつも寮の人間関係に馴染まず、ノイローゼにでもなったのか、（事実適応できずに寮を去った者も何人かいる）と思った。勧められるままに気味は悪かったが抹茶を飲んだ。抹茶を飲んだ最初である。

寮は10時が消灯なのだが、灯が消えるとベッドの上でモソモソしている。いよいよおかしい。暗闇の中へ目を凝らしてみるとおかしい格好で坐っている。これが坐禅を見た最初である。それからどうも二三日、口をへの字にまげて様子がおかしいので彼の行動を観察することにして何の本を読んでいるのかと、本を見ると「しょうぼうげんぞうずいもんき」という変な名の本であった。私が『正法眼蔵随聞記』と道元を知った最初であった。どうも闇に乗じて坐っている姿が異様であったので読み方を聞く間もなく、そのまま、部屋がえになった。部屋がかわってから、妙にその印象が頭に残っていたので自分も彼の行動をまねて坐禅を試みたが根気が続かずいつしか忘れてしまった。そして28歳の時迄、坐禅も組まずじまいとなってしまったという訳である。しかし縁があつて「禅と茶の集い」を知りさらに磨範庵老師の室内に参じることになったのですが、この彼のことも一つ影響しているわけで何

調べ自在に弾き給う 自然のわざの尊しや。

・・・と大声で車中の高歌放吟となるのです。

合掌

### 所得という事 (第5号 昭和59年1月20日)

近年、高額所得者、所得番付、所得隠し等、『所得』という言葉をよく耳にする。“所得”収入、自分の所有となる物、などと辞書には見ることができる。そして大概、人々の間では金銭的な富の概念として受け取られ、特に最近の政治家に不正所得をもつばらにするのを政事と心得違ひして居直っているような例もあり、この言葉の持つイメージをさらに暗いスキャンダラスなものにしてしまっているようである。

果たして本当の意味はどうなのであろうか？もし上に述べたような意味ならもっとぴったりの言葉が日本語にある。欲得という語である。所得=欲得では余りにも露骨ではないか。

そこで、これを「所を得る」と読んだらどうであろうか。所得の名誉の為にもこの方がよい、本来の意味が生き返ってくるように思われる。

では、所を得るとはどういうことか。簡単に言うならば、活躍の場を得ることである。人間に照らして言うならば、自分自身の本来の力を発揮する場を持つと言えるのではないだろうか。

では、本来の力を発揮する自己自身とはどのようなことか？ここで又、はたと考え込んでしまう。把めていないのである。そこで古人の苦心をたずねてみよう。

俳聖芭蕉は、厳しい俳句修行の末に、一句をもって開眼したといわれている。「古池や蛙とびこむ水の音」有名な句である。確かに彼の句風がこの一句あたりからすっかり変わったのである。以後、彼は俳聖芭蕉として自由自在に、不朽の名句をものにしてゆくのである。つまり、自己自身の本来の力を発揮する所を得て、俳句の神髓に徹したといえる。「ポチャーン」この水の音は、今、誰の耳にも響き渡り、波紋の広がってゆく様子を皆が思い浮かべることが出来るであろう。芭蕉は自らのものとしてこの響きを掴んだのであり、この句を吐露したのである。所を得たのである。

芭蕉だけではない。一道を成就した人々は皆この所得者なのである。又、人間だけではない。花には花の所得があり、犬にも猫にもパンダにも木にも石ころも全てこの所得があるのである。なのに内なる宝に気づかず、名誉だ金だと求め狂っているのが、現在の世の中の風潮のようで、空恐ろしい気がする。確かに財力は便利である。金もその本来の力を発揮させ正しい生かし方をせねば、金に振り回されて自らを失うことになる。高額所得者になるのならむしろ高学所得者への道を選んだ方がよいだろう。

禅の修行をしていて考えることは、真剣にすればするほど、自分の見えぬ所が見えてくることである。そして見える場所もとどまっては限られてくる。一步向上すれば更に広い場所を見ることが出来る。一辺の場所に安住せずに努力することが大切であろうと、自らを打って進んでゆこうと思っている。私の師匠は更に、坐り抜いて無所得の所まで行けと言う。こうなると未熟な自分なぞは窺いしれぬところである。

合掌

が縁になるのか判らないものです。とにかく禅を知る人は多いでしょう、しかし禅庭に身を投じる人は本当に少ない。この迷妄というか我他我他暮らして世間の柵の中に頭出頭没している自分というものを、本当にしっかり見つめ直す場が無ければならないと思います。それは禅の修行、参禅弁道しかありません。

偉そうに書きましたが私など純一無雑にやれば良いのですが老師の室内に我見をひっ担いで行ってはガリガリとひっぱがしてもらう。それでも助平な根性で何かを取っ掴もうとする。禅で得るものは無いぞと言われても純粹にはなかなかない。師匠はあきれながらもこちらを策励してくれる、大変なことだと思います。

ところで同期会で渡部君に会ったのですが、禅はやっていないそうで、それとなく禅の会などの事など話したのですがあまり興味も示さずにいました。是非機会があれば勧めてみたいと思っています。

合掌

### 新緑に思うこと (第4号 昭和58年6月10日)

新緑が逆巻く浪の如く萌えて、生命の息吹に圧倒されてしまう季節となりました。坐禅を始めて感じることは、この四季の移り変わりの顕著な日本の自然を素直な感動を持って見られるようになったことです。とくに緑が一番萌え出す頃は、ただただ「!!!」となるのであります。花粉アレルギーの自分は、2月末から桜の散る時までは、クシャミ、鼻水、鼻づまりで難儀をするので、この時期のすぎるのをひたすら心待ちにしているのです。それ！とばかりに桜が咲き、新緑となると、この症状も嘘のようにとれますので一層この緑の感触に深い思いにも似た気持ちをいだかせるのでしょうか？

利休居士の歌に、『花をのみ まつらん人に山里の 雪間の草の春をみせばや』の一首があります。自分はどうも花をのみまつらん人ということが言えます。いや、鼻をのみまつらん人と言うのが適当でしょうか？こうなると自分の風情のなさを嘆じ入るより仕方がありません。しかしまあ、早春の山や野に、小さなふきのとうや、銀色に輝く猫柳の芽などを見つけたときなど鼻すすりながらも「!!!」となりますので歌の心も、理のうえでは解せたとしようなどと思うたら、利休居士の一喝を受けてしまうでしょうか？日本の四季、今回はこの時期だけを取りあげましたが、それぞれに素晴らしい自然が湧き上がる泉のように汪溢しているではありませんか。

30才のひねた男でも、子供が初めてものを見た時のように、自然のありさまに感動できる。そしてそれはじっくりと坐った朝などは特に印象が深いのです。朝もやの中の竹林などは水墨画の格好の題材だろうし、その竹も竹の子を出すこのごろでは、葉を黄葉させ、竹の秋ということになります。こんな大自然の営み、妙味を感じられる自分というものがあったんだな、ふと「昔はものを想わざりけり」との一節が思い起こされて、

空に囀る鳥の声	峰より落つる滝の音
大波小波滔々と	響き絶えせぬ海の音
開けや人々面白き	此の天然の音楽を

## 道場が完成して (第6号 昭和59年6月29日)

風薫る五月五日、快晴の四街道吉岡にて房総坐禅道場の落慶式が盛大に挙行された。人間禅、房総支部関係者は勿論のこと、多くの人々の力によって今、ここに坐禅修行の場が完成した。当道場が広く一般の人々への働き掛けによって、一教団のみの力ではなく様々な人々の物心両面からの協力によって完成できたことは他に類例を見ることの出来ない特筆すべきものである。

房総坐禅道場は四方を緑に囲まれた素晴らしい環境にある。1200坪の境内に、東から隠寮、道場、居士寮となだらかなスロープに沿って配置された建物を、ある人は臥竜であると言ったのだが正にその偉容にその言葉にふさわしく思われる。静かな量感を感じさせる佇まいは、本格の修行の場の素質十分である。

私が坐禅を知った頃、山奥の静かな寺で、一人坐ってみたいと思ったことがあったが、山奥は別として自分の想像していた風景とぴったりなのである。又口の悪い人はこの辺を四街道のチベットなどと言うそうでいよいよ修行環境は整ったといわねばなるまい。

何度か一人で坐ったが、奥歯が自然と噛み合わされ、唇は真一文字になった。そうして、この道場に対して自分はどうしたらよいのか？道場とは何か？と問いを發したのである。聞こえてくるのは木の葉のざわめきであり、清々しく囀る小鳥の声である。山は更に静寂である。幽かに竹の打ち合う音がするばかりであった。『道場を建てるのが目的ではない、この画竜に点睛するというのが、本当の目的である。道場という二文字をしっかりと自らに問うて欲しい』との老師の御言葉が思い起こされる。

人々は多くの門をたたき、この道場を訪れる人もたくさんいることであろう。初めて門をたたき人のような純粋な気持ちを、自分は一生持ち続けたいと願っている。

房総道場の門は常に開いているのだから。

合掌

## 自転車にのって (第7号 昭和60年3月8日)

日頃の運動不足を反省して、継続できる運動として気軽に始めた自転車通勤であるが暮れから正月にかけての休みにはついつい油断して体のリズムも狂いがちである。お屠蘇気分を払拭しようと再開したのが、七草も過ぎた8日からであった。

久しぶりの自転車は鈍った体にちよっとばかり苦痛ではあったが次第に去年の感覚を思い出すに従って調子も出てくる。

暖冬、暖冬と言われていたが、この寒さはどうだ。「なにが暖冬だ。べらぼうめ。」などと文句にならない愚痴をいながらも走りだすわけである。

踏み始めは手足、耳、鼻先が切れるように痛い。秋口の冷え込み当初は「楓葉霜を経て紅なり」などと嘯っていたが、その元気は何処へやら。防寒装備で体はもこもこである。しかし坂を一つ二つと越えるにつれて、内側から温まって手足、末端のしびれが無くなっていく。その頃になるとうっすらと汗をかいてくる。同時に気分も爽快になり「自転車ってのは良い

ものだなあ。」と感心するから不思議である。「そうそう、坐禅と同じだなあ。」独りごちながら、まだ自然の充分残る野路を千葉へと向かう。

走っている時、前後には随分気を遣う。特に朝は車も少ないのでスピードを出している車も多く、十分に注意しなければならない。後方六分、前四分とは、自転車の本の中にあつた言葉である。走行中はペダルの踏み方などで色々と工夫してみることにしている。合掌

## 二つの中心 (第8号 昭和60年9月27日)

4月になり先般、房総支部例会において、支部道友を前に、禅と茶の集いのことについて話をする時間を与えられた。その為に、自からと深い関わりをもつ、この静坐会をもう一度、見つめ直す機会があつたわけなのだが、今更ながら、多くの人々との多くの出会いに驚かされてと云うのが実感である。

私がこの会に参加したのは、53年6月であるから早、7年を経たわけであるが、子供ならオギャーと生まれて、小学校の一年生になる勘定である。振り返って自分を見れば、果たして一年生の資格が有るだろうか？なんとも心もとない思いと共に、光陰矢の如しの言葉が、愈々我身を射るのである。今日は、そんな愚口を並べるのが目的ではない。禅と茶の集いの歩みを振り返る機会を得た折に自分なりに考えていることを述べてみることにする。この会は交通の便及び、会場にも恵まれて、様々な職業、それぞれの個性を持った、多くの人々が参加出来ると云う特色を持った、四方、いや十方に門を開いた素晴らしい会であるといえるだろう。そうして、一服の茶を喫し、語り合いながら、人々のふれ合いの輪を広げてゆくのが、会の目的でもあるわけだ。

私自身、沢山の人を知り、その人達とのふれ合いを通じて、人間性を掘り下げてゆくことも出来るのである。

この会を知ったこと、これは大きな出会いである。仕事の上、社会で、苦しいことがあつたり、つまらないことがあつた時、会へ来て皆の顔を見ると、自然に心も和み、自分を取り戻せたような気がする。これ皆との楽しい語らいの結果である。会が終る「皆それぞれがんばっているんだな。ようし俺もがんばるぞ！」と来週が待ちどうしくもなり、しっかり坐ろうと云う気が湧出する。それは人と人とのふれあいの大切さを体験させてくれる。これら、出会い、語らい、ふれあい、の三つは、禅と茶の集いの宝であると云っても過言ではないだろう。

禅を始めた時、とにかく坐る機会を積極的に持つことにしよう決心して参加した会である。金曜日の午後は、何事よりもこの会を優先させよう決めてから、どうやら最近やっと自分の中で一週間の節目として定着してきた。そして禅との関わり合いの人生の中で、一つの中心として、会をすえていこうと思っている。

今、一つの中心は(元来中心というものは一つなのだが。)と云うと、これは次回と云うことで次号に続きます。

合掌

## 房総坐禅道場の今頃 (第9号 昭和61年6月6日)

4月になり「禅と茶の集い」も新たなスタートを切ったが、ここで新しくこの会に参加される方々への紹介の意も兼ね、四街道吉岡の道場について少しく書いてみよう。道場は、正式には人間禅房総坐禅道場と呼び、この五月で三年目を迎えようとしている。人間形成の禅が中心の本格道場である。

今頃の時期といえば千葉でもソメイヨシノが満開で花見気分も最高潮に達しているが吉岡では周囲のサクラに未だ花を見ることは出来ない。その種類の異なる為もあるが全体として市街地より一週間遅れるようだ。地形的、環境的(人家が少ない)に、寒さが厳しいためかも知れない。

道場への参道は、県道より入ると、半分ほどで、一戸の農家を迂回する形になり、そこからの一本道の右側は、サクラの古木の並木となる。左手はやや広々とした畑で麦の芽も青々としている。落慶式に参加された或る老師(禅の指導者、師家)様が、「この道を一人で行って行けば、公案など簡単に透過できるだろう」とおっしゃられた程、静かな風情のある道である。特にサクラの頃ともなれば、車の素通りでは本当に惜しい程、趣のある風景である。そこが終わると一段と細い林間の道をゆっくりと下りてゆく。徒歩ならば、このあちらも又、可憐な野草を数多く見つけることが出来る。愛好家にとって見れば声を上げたくするような場所である。ここを抜けた所から、急に視界が開け、三堂がどっしりとした佇まいを見せてくれる。

初めての人には「こんな立派な建物があるなんて!」と皆驚かれる。特に最近では整備も進み、周囲との調和もとれてきた。三月の摂心の時には、玄関先のまんさくの花ぐらいしか目につかなかったのが、銀色の新芽がそこここに吹き、道場全体が生き活きと輝きだしたようである。ふきの芽も小さいのが伸びだし、鳥の声も囀りに変わり、その種類も大変多い。畑を見ると土が黒々として、息を吹き返したようで、ニラ、キャベツなどが育ち始めている。

今年も又一年、様々な行事が計画されている。摂心は勿論だが、茶の会、企業グループの研修会、子供の坐禅合宿、静坐会等々沢山の人が関わりを持つことになる。ある人は足の痛さに金輪際、坐禅など組まぬと思うかもしれない。ある人は決して忘れられぬ思い出を刻み込むかも知れぬ。それら一つ一つが、道場の歴史として、印されてゆくであろう。

自分を省りみると、こんな素晴らしい道場を持って、本当に、腹の底から「ただいま」と帰ってゆける修行をしているだろうか?と問い直してみなければと思っている。

合掌

## B・イノーのこと (第10号 昭和62年3月6日)

先般NHKの番組で世界最大のサイクルロードレース、ツール・ド・フランスの特集を見た。自転車競技と呼ばれるものは多い。例えば、タイムトライアル、トラックレース、ダート、ケイリン(競輪は世界にそのまま通じる)など、トライアスロンなども大きな意味で自転車競技といっても良いだろう。ロードレースはこれらの中で花形的な競技ともいえる総合

的なものである。特にヨーロッパでは絶対的な人気を持つ。その中でもツール・ド・フランス(以下ツールと呼ぶ)は八十年もの歴史を持ったビッグなプロレースである。ツールを征した者がサイクリストの頂点に立つといっても過言ではない。

コースの全行程は約五千キロメートルに及び二十四日間を要する過酷なレースで、パリをスタート、フランスをほぼ一周、再びパリに戻った時には、選手の数は激減するといわれている。ちなみにあの冬季オリンピックのスピードスケートの王者エリック・ハイデンさえ、今年のツールでリタイアしてしまった。いかに過酷かは、容易に想像することが出来るであろう。

コースは毎年変わるが、全体が数ステージに区切られ、ピレネー、アルプスの山岳走行が組み込まれ、ステージごとの記録を集計、区間賞、総合優勝などが競われるのである。又、総合でトップに立つものだけが、栄えあるジャージ、マイヨジョーンを着て走ることが許される。このマイヨの行方こそファンの大きな関心を集めるのである。

86年ツール注目の的はなんといっても、前年のツールで落車事故に会い鼻の骨を折りながらも、史上三人目、ツール五度の制覇を飾ったブルターニュ出身のスター、ベルナール・イノーであり、彼の率いるラ・ビ・クレールチームであった。そして前人未踏のツール6回目の優勝という大きな夢に挑む。イノー最後の舞台ともいわれていた。最後の意味は彼の年齢の限界もあるが、チームのサブリーダー格のグレッグ・レモンの実力が彼の目からしても、充分育ってきたことと無関係ではなかった。レモンはイノー自身がスカウトして育て上げた愛弟子である。チームメイトとしてイノーの好アシスト役を立派につとめ、彼の後継者として申し分のない素質を持った若きアメリカ人サイクリストである。

こうして始まった86年ツールはラ・ビ・クレールが他のチームをつぶしながら有利な戦いを進めたのであったが、イノー自身の調子はいま一つで、アシスト役のレモンは、イノーに対して不安を持ち、やや焦りを感じていた。レモンの自転車が遅れ気味の彼と併走した時、彼はレモンの耳元でなにかを囁いた。次の瞬間、若きレモンは野に放たれた虎の如くにスパートをした。それはアシスト役の走りではなく、イノーが今まで担ってきたチームリーダーの走りそのものと云って良かった。

これはイノーがマイヨジョーンをレモンに託するに他ならなかった。ここでイノーが全てを許し、彼の一本立ちを認めたことは誰の目にも明らかなことに見えたのであった。

期待の通りレモンのペダリングは素晴らしく、彼が今年のツールの覇者となるのは当然の如く思えたのであった。マイヨを着て走る若きエースは得意の絶頂にいた。しかし次にイノーの取った行動が不思議であった。この行動は順風満帆でチームを率いて走るレモンにとっては一大痛棒であった。自分の優勝をパーフェクトにアシストしてくれるはずのチーム内から、それも最も尊敬して止まぬ師匠が、全てを託してくれたはずのイノーが、こともあろうに自分の前に立ち上がったのだ。「マイヨは戦い取るものだ。同チームであろうと個人優勝は狙ってゆく」と宣言して個人タイムトライアル区間で驚異的な強さを発揮して、実際にマイヨをレモンの手から奪い返してしまった。結果的にレモンはマイヨのないチームリーダーの恥辱を与えられてしまったのである。この時の彼の気持ちはもってゆき場のない不満と、自分がイノーの為にどれだけ尽くしてきたかを思い返して、彼を恨みすらした。

実際にイノーのさし出す手にさえ応じようとしなかった。これを機に後半のレモンの走りは厳しさを増して、絶対的な強さを発揮、86年ツールの優勝へ、アメリカ人初の栄冠へと突き進んで行ったのである。

イノーのこの仕打ちはなんであったのであろうか？記者の質問に後にこう答えたのが印象深い。「ツールがいかに怖いものか、彼にもわかったと思う、本当のチャンピオンになるのは必要な経験だ。そして彼ならきつとなれる」と確信をもって云った。なんということであろうか。獅子が我が子を谷底に落とすようなことをやる。間違えば元も子も無くなる真剣勝負である。自分の最後の力を振り絞って弟子を本物にする。師と弟子の継承というものの典型を見る思いがする。本当の道というものが洋の東西を問わず厳然として存在するのだと感じさせる場面であった。私にはそう思えたのだ。「いや、イノーだって名誉と金で自分が優勝したかったんでは？」こう思った人もいたかも知れぬ。次の話をしてイノーの人となりを知ってもらえたらと思う。

彼がある有名なレースをトップで走っていた。雨で悪路となり、自転車を走らせることが出来ない状態になった。このような時は自転車を置き走ってもよいことになっている。他の選手は次のステージに向かって走った。彼は「私はサイクリストだ。ジョガーではない。」と云って、優勝間違いなしのレースを決然としてリタイアしてしまった。これなども、ベルナル・イノーの自転車に対する一つの見識といえないであろうか？

私も一人でポタポタと自転車に乗っかっているがこんな小さな人力車にもこんな大きな世界があるのかと感じ入ってしまった。

合掌

#### 静坐会の四季（10周年記念号 昭和62年11月8日）

今日も花入れに半夏生、しもつけ、のこぎり草など夏草の茶花が活けられている。いかつい男性会員も仕事の疲れを忘れ、ほっと一息つく瞬間である。ビルの中の茶室ではあるがお茶係の心入れで、緑の抹茶、四季折々の花と茶菓子、松風の音などの馳走とともに静かな一室が建立される。初会以来大切に扱われてきた素朴な道具で薄茶の一碗がふるまわれる。この一碗に感謝合掌して味わうのだが、初めて抹茶を喫する人は作法が気になるようだ。会員の所作を見て大いに安心（？）、肩の力を抜いて服している。

点前が終わると坐禅になる。静坐環境は決して良好とは云い難い。特に空調に問題があり、快川禅師の火定三昧とまではいかぬが、脱水状態になる程汗をかくことがある。又、初心者には歌声、足音、騒めきなども気になる要素であろうか。しかし様々な問題点はあるにせよ、停滞なく会が進められ、公共の施設の中で定着してきたことの意義は大きく重い。「黙って10年」の言葉通り、これが10年の歳月なのかと一種の感動を覚えるのである。

私自身、9年間の在籍がそのまま我禅歴であると云って良い。入会してまもなく庶務係になった。準備の工夫は重要で、不慣れと工夫不足で慧純さんを始め、会員の方々に随分迷惑をお掛けした。こんな自分の無能力に嫌気がさして、何度もやめて責任逃れをしようとしたことがあった。その度、老大師の「段取り、真剣、尻拭い」のお言葉を思い返し自からを反省、又諸先輩方のやさしい言葉と親身の策励によって会と歩むことが出来たのは有難いこと

であった。そして入門の縁を持つことが出来たのは大変幸せと感謝している。とにかく「正しく・楽しく・仲よく」の仲間意識に支えられて来られたのである。

10周年と云うことなので一つここで会のマル秘を公開しておこう。毒のあることなので全ての人に通じるとは思わないがあえて漏らしてみよう。これは会終了後に行われる酒行のことである。普通酒行は以心伝心、誰からともなく（？）云われ、撃石火閃電光の如く決定する。決まったが早いか久参、新到を問わずセンター近辺の居酒屋に掛塔し、只管に飲む行である。

春は桜、夏は大暑気払いの会、冬は大忘年会とその機会に事欠くことはない。大いに飲み、語るのが常で、今まで静かに茶を喫していたこれが同じ人間かと疑う程の変わり身である。この変わり身こそが酒行者の酒行者たる所以で面目躍如の感がある。又酔ってテーブルに伏す様はまさに庭詰の雲水のようなものである。専門道場と反対なのはこの道場、誰でも入れるが、長居を決め込むと追い出しを喰らうことになるぐらいだろうか。いやしくも本当の行者は引き際を心得て、看脚下の後、他人の靴と間違わないよう注意して肅々と引き上げるのを上とする。この厳しい行を経験してこそ確固たる会員魂が湧き、あの足の痛い例会に参加しようという気持ちになるのである。

しかし田舎へ引込んだ現在、本格の機会に恵まれないのがちょっと残念な気がしている。

#### 10周年記念事業の概略（第11号 昭和63年8月15日）

記念事業も成功のうちに終え、皆様もほっとしつつ、力を発揮できた満足を感じていらっしゃることでしょう。又、次の区切りへの力強い一歩を踏み出されたことと思います。皆様大変ご苦労様でございました。

庶務係の立場から、記念事業実施までの概略を報告しろとのことですので、会員各位のご苦労はとて書き尽くすことは出来ませんが簡単な、内容、陣容などについて報告することとします。10周年記念事業は大きく4つの事業を柱としました。

1. 10周年記念式、記念講演会
2. 記念茶会（1日禅と茶の体験教室）
3. 記念誌の発行 『松風』
4. 記念品の作成

これらの事業完遂を目的として、禅と茶の集い・廻向会による10周年記念実行委員会が設立され、本格的な活動が始まった訳であります。

これらの諸事業の資金的な問題は、会員がそれぞれ喜捨をし、又、関係者の皆様のご喜捨、人間禅房総支部等々のご協力を得て解決を見ました。会計担当者、諏訪原、鈴木よねの両氏でした。

62年5月に両会の合同会議が開催され、日程の決定を受け、各係の選任、事業の進め方などの工夫がなされて本格的な活動が開始されました。

## 1. 記念式典、記念講演会（参加者 140 名）

11月8日（日）と決定され、事業の核ということから両会長（登坂、小川）が専任されて、記念講演には白田貴郎（千大名誉教授）先生に『東洋の道・禅の悟りを中心として』の演題でご講演していただく事になり沢山の人もこの機会に先生の深い体験にもとづいた貴重なお話を聞いていただこうと、新聞、市広報に内容を掲載、当日は多数の参加を見ることができました。

式典は講演会終了後、多くの来賓をお招きして行われ、今後の発展を誓って盛大の内に無事終了、懇親会に移りました。栗田氏の名司会、懐かしい顔もたくさん出席され、楽しい会でありました。

## 2. 記念茶会（1日禅と茶の体験教室）（参加者 47 名）11月29日（日）

両会の活動の多くの方々に知ってもらうことを願い、座禅、法話、茶会と盛り沢山の企画で、初めての人々を対象に実施された。

内田先生の禅の話に続いて坐禅、茶と禅の深い関係を自ら体験を通じて感じ取っていただけるように各茶席も禅的な心づかいにあふれ、秋の一日を有意義に送ることができたのではないのでしょうか。茶席責任者は斎藤（礼）、松村、その他の方々でした。

## 3. 松風記念号の発行

従来、禅と茶の集いの会誌であった松風を10周年の記念として発行してはとの提案で、両会合同の編集委員会が設立され、テーマを禅との出会いとして寄稿いただくことになり、縁りのある方々へも広くお願いしました。

このセクションが非常に大変なところで、編集会議の連続、印刷までの間、委員の方々のご苦勞は並々ならぬものがありました。力量と実行力で立派な松風が出来上がり、関係者の皆様のお手元へ届いたものであります。発行部数は200部でした。担当は鈴木（祥）松村両氏他です。

## 4. 記念品

当初、様々な案がありましたが検討の結果、白田先生にご揮毫をお願いしたところ『和敬』の2字をご揮毫下さいましたので早速、色紙印刷として200部作成しました。担当は諏訪原、大友でした。

以上が10周年記念事業の概略であります。最初は漠然とした事柄が人々の力でなされてゆく、この過程で生き活きとした働きが発揮されてゆく禅の修行の作務であり、行ではないかと思えます。

一事にあたる、この一事の大切さをそれぞれが体得されたことと思いました。皆の力が真の協力を得て、一事がなされると思いを新たにいたしました。反省会の席上で慧純さんにいただいた道元禅師の言葉「花の色は美なりと雖も、独り開くに非ず、春風を得て開くなり 学道の縁も又かくの如し、（以下略）」を何度も繰り返していると自分の存在の小さいこと、しかし大切この上ないことであると実感するのは私だけでしょうか？庶務係として、資料の未整理、少なさを反省しつつ概略の報告とさせていただきます。

## ご利益満点（第12号 平成元年8月13日）

先日、社員旅行で伊豆へ出掛けた。

遊山の旅なので楽しい時を過ごしたのであるが、帰り際に最近改築されて観光客のよく立ち寄るといふ観音様へ行った。初めて見るその偉容にまず目を驚かされてしまった。白亜の巨大な観音坐像が山頂に露坐し、参拝者を見おろしているのである。その中腹にはこれまた、朱色に彩色された中国風の本坊や堂塔などが色鮮やかに点在している。

バスを降りると係の人と思われる人が、この寺の由緒を記した紙を手際よく配った。それには、当時の拝観料は釈尊誕生の地（ルンビニー）の復興に寄贈されるとあった。係の人が入り口で「皆さん、このベンチに坐ってください。観音様をバックに記念写真を撮ります」といった。私は幹事であったので、「えー、これは買い上げなくてはいけないのですか？記念写真は前の見学地でも撮っていただいて買わされているので、皆もう結構だと思うのですが？」と心配そうに口に出すと、「一枚サービスになっていますから、是非お願いします。撮らせてください」との真剣な顔に気押されて、渋々並んで撮影することとなった。幹事面の私が、「希望者が買えばよいのですね」と余計な念を押すと、「強制はしませんので！」との返事が返ってきた。これから参拝するのにつまらにことを云ったと反省しながらも入り口へと向かった。

浄財たる参拝料を支払い中に入ると、最初の堂にはヒンズー教の神々とそのマンダラとその神々の小さな像がガラス越しに飾ってあった。普通だと、寺僧が案内係と大書されたプラカードを持って、団体客などにおもしろおかしく歓喜天の縁起などを説いて下さるそうだが、ちょうど昼食時であったせいか、プラカードは入り口に立てかけられたいたのがちょっと残念であった。

ルンビニー復興の為か、奇特な人々があげたご浄財はそれらの小さな像にも、床板の見えなくなるほどあげられていたし、普賢菩薩の象の牙にも五円玉を通してある。ガラス越しの狭いすき間からではあろうが日本人の器用さには感心した。

堂を出ると滝に打たれた慈母観音像、宗祖の立像、水子地藏像、七福神と数多く、それらについて浄財箱の数もうなぎ登りである。

そして案内板には「この上に登れば登る程、ご利益を授かれます。山に登れば足腰が丈夫になり、延命すること間違いなしです」と親切に書いてある。いよいよ有り難くなって次へ進むこととした。境内には読経のテープがスピーカーを通して流れていた。

私がここまで浄財をひとつもあげていなかったことに気がついたのは、「観音様はあなたを

見えています」との立て看板を見つけたからであった。結局最初からあげてゆかねばご利益もないものとあきらめ、以後もごかんぺん願い進むことにした。

大観音様の下へ着くと、ここには「煩惱滅除、108つの鐘」とある。大仏をぐるりと廻るように、喚鐘が鉄製の階段に溶接されたむきだしの鉄筋にぶらさがっていた。

最初に木づちが置いてあり、一回100円也とあったので、100円で108の煩惱が消えるのは安いとも思ったが、個人的な理由から108回も喚鐘を打つのに逡巡し、自信がないので辞退したのである。

白亜の大観音は間近で見ると圧倒される程大きかった。上まで一気に登ったので一息ついていっていると、背後の山脈から本物の不如帰が澄んだ声を響かせた。あいにくの梅雨空で海岸線も見えなかったが、この一声でここまで登ってきたかいがあったとの思いで一杯になってしまった。正にこの山頂でこの声を聞かせんが為の心憎いばかりの演出だとしたら、当寺の住職には脱帽せねばならないとも思った。

山からおりて右手には、水子地蔵が一杯であった。山腹の霊園墓地のように土地をうまく利用してある。最近このような供養を主とする寺院が多く、ご利益を高らかに謳うところ程、老若男女の信仰をうけるようである。

禅と茶の集いのことをふと考えて、それぞれの良さもあろうが、少人数でも素朴で素晴らしい会だなとつくづく思った。

寺内に洋船をかたどった食堂があり昼食となったが、案内の僧が奥の方で黙々と生姜焼定食を食べていた。バスが寺を出ると、両側の紫陽花が梅雨空をうつしてとても美しかった。「あっ、サービスの写真をもらうのを忘れた」と声をあげた時は、バスはもうだいぶ来てしまったところであった。やはり私にはご利益は……

合掌

#### 夏 (第15号 平成4年10月10日)

この夏、小さな膀胱腫瘍の摘出手術をしたのを、機会に、体全体の精密検査をした。40年目に初めて、オーバーホールというわけだ。ある意味で日常生活の再点検、再構築の良い時期であった。そんなわけでもないのだが、通院などでまとまった休みがとれず、子供達をどこにもつれてゆけなかった。

そこで昔を思い返して、近所へ虫取り行ということになった。市内とはいっても、比較的自然の豊かな我が家近辺は、虫取りの穴場といえる。くわがた虫やかぶと虫、大型のトンボ、蟬各種、工夫次第では戦果も多くなる。

特に下の男の子が大の虫好きで、2才の頃から素質を発揮、網を振りすようになっていた。虫取りの極意はやはり無心で、なんの銜いもなくくり出す網の働きが良いようで、大人でもむずかしい、あげはや、鬼やんまという獲物を小さな子が掴まえるにはシャッポを脱いだ。大人は雑念を持ちながら、獲物に近づくとせいか、気配を感じ取られてうまくゆかない。子供の能力を置き忘れて来たのが大人といえるかもしれない。なにごとくも雑念を殺すことだな！

などと感心してばかりでは、親の権威が示せぬと、そこは知識を生かし、たかいところの蟬取りにやっと面目を保つことができた。

こどもの虫への興味の対象が幅広く、いも虫、毛虫、蛾の幼虫、さなぎ、くも、果ては、ゴキブリにまで及ぶので、母親の悲鳴も時折あがる。この夏に採取した昆虫の種類が、大学ノート半分に分類されることとなった。写真を撮り、名を調べ、幼稚園の夏休みの作品に提出することになったのだが、元写真部の母親の写した写真がピンボケで、とうとう、図解の役目が、元美術部の父親へ廻ってきた。

大自然の妙を目の前にして、筆は遅々としてすすまず、ただただ、らしきものを書くことになってしまったのは残念であった。こんな体験を通して、子供達には生命というものの躍動を感じとって貰いたいと思っている。子供は残酷な部分があり、つかまえた虫たちを粗野に扱う。又、虫を踏みつけたりもする。そんな時、厳しく注意することになっている。又、小さな虫かごからリリースすることも大切なことだとも教えている。久しぶりに童心に戻って遊んだ夏休み。少し、目玉が澄んだような気がしたのである。

#### 夏休み (第16号 平成5年11月12日)

忙しい、忙しいで家族サービスを怠っているのだが、夏休みだけはそうもいかない。

我が家も妻子の矢のような催促、毎年のことなのだから、計画的な準備をしていれば良いものだが、泥縄式に宿の手配に電話をかけまくるが、良いところは満杯、それに授心後のこともあり、内心は家でゆっくりなどという下心があるものだから、「ここもだめみたいだ！」などと声に力がこもる。しかし彼らの厳しい視線はそれを許さないどうしても力強い意志がこめられている。

「そうだ！ファミリーキャンプだ。」昨今の流行にのってオートキャンプ用品だけは一応用意してある最初はちょっと疲れるかもしれないが、一ヶ所ですむし、あとは一日ごろごろ出来るだろうとの考えが浮かんだ。それとばかりにキャンプ場への予約の電話をかける。甘かった。このブームだ、どこのキャンプ場も空きがあるはずはない。「駄目みたいだな。」の言葉に、子供たちの目はさらに厳しい。その時、「そうだ！四街道の道場が良いよ。」「えーっ」「道場は理想的な環境だし、第一安全だ。千葉のチベットとも言われるが、俺に言わせれば、千葉の軽井沢だ。」と強引な説得を続ける。なかなか同意が得られない。「ごみごみしたキャンプ場で本当のアウトドアライフは楽しめる訳がない」とどうやら子供たちを説得。妻の顔を見るとさめた視線を投げかけてきた。しかし他に手がないとみるとあきらめたようだ。

道場へ着いてテントの設営、ロープ張り、これらは昔のテント設営にくらべれば簡単、かまど掘りだの、便所設営などの必要もない。コールマンで台所は完成、実に安易で、ボーイスカウト経験者としてはやや物足りない気もするが、マッチ三本で飯を炊けとか、水源を確保しろとかロープで橋を組めとか、無理難題がないのは嬉しい。

食事はもちろん、アウトドア親父定番の焼き肉カレーだ。それも一泊だから夜を乗りきれれば良い。星空の下で缶ビール。最高だと思ったがポツリときて、星は見えない。しかし夜は

ホテルを見せ、子供達も満足そうにはしゃいでいる。「ハッ、ハッ、ハッ・・・お父さんを見直したか。」父親の威厳を少し取り戻したような気にもなれて、混雑もなく、素晴らしい環境、静寂、どれを取ってみても第一級のリゾート?? 房総道場さん、本当にありがとう。

#### チンギスハーンとウルツサハリ (第17号 平成6年10月21日)

モンゴル帝国の版図はアジアからヨーロッパへ及び歴史上最大の帝国となった。その影響は極東の島国日本とて例外ではなかった。草原に興隆した騎馬軍団は黒雲の如く全世界をおおったといっても過言ではない。その創始者(太祖)テムジン、黒き狼の子、いわゆるポリデギン部族のチンギスハーンである。その功罪はいろいろあろうが、モンゴルでは今でも神のごとく尊敬を集めていることは人々に広く知られている。中国北方のモンゴル部族ボルチキンのテムジンがまたたく間に全モンゴル平原を統合し大クリルタイによって、大ハーンに推されるや、四方の世界に向かって征戦を開始する物語を私も胸おどらせ読んだ覚えがある。

しかしその侵略は惨をきわめ、掠奪と殺戮の嵐であった。降伏せぬ民族や城は屠り去るといふ恐怖の戦法なのである。戦線が長くなれば後方に不安を残さないために、止むを得ぬとはいえ、その苛酷さの度合いは常軌を外れている。大ハーンの軍団の構成はモンゴル兵よりも降伏兵(被征服国の兵)の割合が高かったともいわれている。少数のモンゴル正規兵の先鋒としてそれらが隣国になだれを打って攻め入っていったというのが現実であったようだ。ある意味では後戻り出来ぬ状態に追い込まれての進軍のため、過度の殺戮が行われる原因ともなったといわれている。又、切り取り自由というような軍規により破壊という面が増幅され荒廃しか残らぬことになった。たしかに攻め込まれる国々の人々が「彼等は来た。破壊した。焼いた。殺した。奪った。そして去った。」こうした言葉で表すのも仕方がなかったかもしれない。しかし多くの国を征服するにつれて捕虜の数も増える。王族や将軍たちにもその功績に応じた富の分配をしなければならなくなる。又、秩序が必要になり統治のテクニックも必要となってくるのは当然である。それに対して大ハーンは大きな視野を、その版図の拡大とともに広げていった。モンゴル人では持てない視野や技術、知識を補うために征服民の中から多くの人材を登用し、自由にその能力を発揮させたのである。それがモンゴルを急速に世界帝国として発展させる原動力となった。

西からは経済交流による商業的合理性、中国からは国家的な支配制度というような特色を取り入れていったのである。だがモンゴル人の特性を忘れることはなかった。サマカルンドに都を定めた後にも王族たちは宮殿に住むことをせず、都周辺の草原に大テントを張って住むのが普通であった。モンゴル人の芯は忘れることがなかった。こうして、東西を融合した史上空前の世界帝国を築いてゆく。その中で中国の影響は大きかったと思われる。その証拠に大ハーンが残した国で最大のものはフビライの統治した『元』でその形態は中国古来の王朝の伝統を継いだものといつてよい。モンゴルの統一のなされた頃の中国王朝は漢民族の支配するものではなく、満州より起こった女真族の金王朝であった。それ以前は北宋(漢族)

と遼(契丹族)の二大国家が中元の雄を競っていた。宋が女真の力を借り遼を滅ぼすとかえって女真によって南に追われ中元を失って南宋と呼ばれた。女真族は国号を金とし中原の主となった。その金王朝でさえ北方騎馬民族国家でありながら伝統的な儒教国家の形態や制度を取り入れ漢風の文化の離京を大きく受け入れざるを得なかったのが現状であった。中国国家の底流を形成する漢文化の底力を感じざるを得ないのである。これこそ異民族支配がいつかは漢民族の正当性を訴える力によって打ち倒される中国の歴史の流れの必然をよく表している。

金王朝では官僚に漢人や滅ぼされた契丹人が数多く登用されていた。王朝の特権階級こそ女真で占められていたとはいえ、制度を実際に管理する行政官僚はこれらの人々が当たっていたというのが現実であった。草原に統一された大モンゴルが興隆してくると、中国北辺を侵し、金王朝の安全がおびやかされてくる。中原の安定は失われた全土に大乱の気配がただよい、王朝の危機が迫ってくる。そうした中、金王朝の契丹人官僚、耶津楚材(ヤリツソザイ)がいた。彼は北遼の皇統を継いだ名門の出身で、進士の試験に置いて首席を取る程、優秀な人材であった。彼は来たるべき大乱を予期していた。金王朝の滅亡という形で。そんな日常のなかで、自らの拠り所を仏教に求め(特に臨済禅)、自己の探求を怠ることなく人格形成を熟成させていた。彼の考えでは大乱の中で一番大きな苦しみを受けるのは民人である。仏教の教えの根本は衆生済度であり菩薩の行によってこそ人々を救えるとの確信を強めていた。

一方、チンギスハーンの側近の中にも契丹人が多く彼等から楚材の評判を知ったハーンは彼を幕営に招くこととした。ハーンの元へ招かれた楚材はその能力と人間性によりハーンに重用されるようになった。ついには宰相の地位まで登りつめ、彼の理念をハーンの政策の中で実践していくこととなったウルツサハリ(モンゴル語では長いひげ)とハーンは彼を呼んだ。モンゴルでは本名を呼ばぬことが年下の者への尊敬を表したといわれているから、楚材がいかに大王に信頼されていたかがわかるエピソードである。

ハーンの死後、後継者のオゴタイにも仕え二代にわたってその才能を発揮していった。凶暴なモンゴル軍団を節度ある軍隊へ、掠奪でまかなっていた国費を租税の整備によって行うなど税制の改革、政治・軍・監察の三権分立、国家的基盤の安定に多くの力をそそぐなど大きな功績を残している。征服者と禅者、一見異質のようであるが私は大きな興味を持った。

大きな歴史の流れの十字路、湛然として坐り、大定力を養い大乱の中でその力を遺憾なく発揮する。大禅者の真骨頂をみる思いがするのだ。

大乱といえば幕末の騒乱の中、江戸城の無血開城に大きな力を発揮した鉄舟居士のような日本の大禅者もいる。いざと云う時に大きな力を出すことが出来なければ本格の禅とはいえないかもしれない。

ウルツサハリ 本名 耶津材 号 従源湛然居士 禅を万松行秀禅師に師事。その著作に『湛然居士全集』一四巻、『西遊録』などがある。

参考文献 耶津楚材(陳舜臣)中国の歴史(貝塚茂樹)他



盟友 (禅と茶の集い・廻向会20周年記念号 平成11年9月1日)

3年ほど前、屋根(瓦)補修の仕事を細々と始めました。2年ほどは鳴かず飛ばずで心配でもあったのですが、去年あたりからポツリポツリと仕事もでてきたところでした。この仕事の修行時代の上司である栗田さんという人から、一緒にやってみないかと打診があったのは、ちょうど1999年の2月の始めからです。とはいうものの、時期的な問題、資金の問題等を多く抱え自分自身は逡巡していました。とにかく会って話だけは、ということで彼と会うことにしました。会って彼の話を聞き、これは決断のいることだったのですが、とにかくやってみることにになりました。

この先輩は同じ歳ですが、2年ほど前に胃癌の手術を受け、再発の不安を抱えながらも、私と一緒に一つの形を作りたい、一つの組織を残したいとの希望で、その気迫にやや圧倒されたというのが事実だったかもしれません。「俺は、再発の心配もあるが、とにかくできるところまでやらしてくれ、3か月で何とかなるよ。」というわけです。

その時、死の恐怖をなんとか仕事で忘れようとの思いだったかも知れませんが、彼の真実の言葉を前にして、決断しての船出でした。彼には、体と相談しながらやってくれと言ひ、営業の全体を任せることにしました。営業員の募集、チラシ配り、配車など忙しく働き、どうやらセールス活動が動き出したのが、2月末のことでした。彼はその後命懸けで会社作りに力を尽くしてくれました。

ご承知のとおり、営業形態を訪問販売としていると、まずは、会社の信用性、工事の信頼性を第一としなければとても事業を進めていくことはできません。営利追求第一のみに走り、会社をつぶしてしまった例は、枚挙にいとまがありません。また、その姿勢によって社会問題を起こした例もあります。

とにかく、本工事は自社の工事人で行い、補償体制を取り、アフターケアには万全を期することを工事部門の第一方針としました。また、営業は押し売りをしない、適正な利益、そしてお客様に喜んで長く付き合っていただくことを基本にして進めようと話し合いました。

工事人の心得は、挨拶に始まり、正しい言葉使い、心を磨くつもりで仕事に当たりなさいと指導しました。営業には、小さな会社のためいろいろな人が集まりますが、中には渡りガラスのような人もいます。いわゆる営業ずれた人たちです。そんな人の常は、適当に稼げるだろうという向上心のなさです。

「小利口に立ち回ってみたところで、実績はついてきません。簡単に言うと、馬鹿になってお客様を訪問する。訪問した件数が実績に比例するわけです。誠実に自分に嘘をつかずに本当に必要とするお客様に会うことです」

以上の様なことを朝礼で営業担当の彼が言うわけですが、笛吹けど踊らずというか、心に正しく受けとめられない人もいます。私は脇に立っていて、何度かそういう人の肩をゆすり、怒鳴りつけてやりたくなることもありましたが、彼は、5月の検査で肝臓への転移が判明した後も、私には余り弱音を吐きませんでした。「時々、意識が遠くなるんだよ」などと言うことがありました。6月の給料の後、「余力になれなかったけど、俺今度静岡に戻って自分の会社を作りたいんだ」と言うので、「体に気をつけて向こうでも頑張ってくれ」と言って、退社を認めました。工事には泊まりがけでも行くと約束しました。小田原の病院で新しい療法を試してみるとも言っていましたので、そうした方がよいとも言いました。

5月のある日、私に「俺、静岡に墓の手配をしてきたよ」と笑いながら言った時、余りにあけらかんとした顔だったので、私も「あっそう、よかったね」と笑顔返してほっとしたことがありました。「俺、変だよな」、「いや、いい覚悟だよ」と言うのがやっとなりました。彼が仕事のことなど忘れて、自分を見つめる時が必ず来ると思っていました。静岡での会社作りのことは、今の会社から身を引くことの心苦しさと、私へショックを与えないための責任感の強い彼らしい思いやりだと思っています。本当に感謝しています。最近、彼の携帯の伝言ダイヤルに「こっちはうまくやっているよ。心配ないよ」と入れておきましたが、まだ返事がないのが少し気掛かりです。

市川の道場にて (第19号 平成16年11月3日)

昭和53年頃からのことだが、市川の禅道場の留護係(留守番)を何ヵ月かに一度、担当することがあった。周囲に民家がせまってはいるが、道場は広く、手入れの行き届いた、禅の修行の場にふさわしい佇まいである。山内には、耕雲庵老大師のお住まいや、いくつかの茶室、風格のある禅堂などがあり、幽邃な雰囲気にも包まれている。一度だけだが、杖を手に裏木戸を開け、出て行かれる上品なご老人をお見かけした。それが老大師であった。たったそれだけのことであるが、とても強く目に焼きついている。昭和54年、忽然としてご帰寂された。

ある時、宏道会の剣道場で白い剣道着のご老人が若い人たちに稽古をつけていた。その老人は左右に、ゆらゆら揺れながら、若い人たちの激しい汗と気合いの打ち込みをなんの造作も無く受け流しておられた。まさに動と静の見事な情景がモノクロームのコマおくりの様に現前していた。弟子達は、つぎつぎと漆黒の渦の中に吸い込まれてゆくかの如く、打ちかかっていた。実際に、この様な剣道は、生まれてはじめて観るものであり、鳥肌が立った。剣禅一如の無得庵刀耕老居士であった。当時80歳を過ぎていると聞いて、ただ、唸るばかりだったのを憶えている。

また、ある日曜日、静坐会も終わり、皆、三々五々帰った後、山門をフッフツと息を吐きながらゆったりとした足取りで如々庵老師がやってこられた。手をあげて「ヨッ、宜しくた

のむぞ！」お迎えした雙峰庵老居士（現老師）と私に大きな声でおっしゃった。担当支部道場の建設浄財を一行物の揮毫の頒布によってお集めになっていたが、私もそのご揮毫のお手伝いということで、広い坐禅堂がつかわれることになっていた。まず、たっぷり墨を磨り、適当に切った和紙を、畳に敷かれた毛氈にさっとお出する。老師は大きなお体で、四つん這いになりながら、フーッと息を整えながら、次々にご揮毫になる。あの名著『一行物』の中の禅語の数々が、目の前に墨気満々と現れてきた。……

後年、道場の落慶なった時、「この道場は、わしの膝と引き換えじゃ」とおっしゃったとお聞きし、この時の光景がまざまざと思い出され、目頭が熱くなった。その日、昼食をご相伴させて頂いた折り、「おぬし、修行の方はどうじゃ。」とのお言葉、あまり気にもせず「去年、道号を頂きました。」と馬鹿正直に、やや自慢げにお答えすると、「ふうん、そうか。」と軽く答えられた。少し拍子抜けした。一頻りお話をお聞きし、また揮毫のお手伝いをした。夕方、来た時のように、ゆったりとした足取りで下山されていった。私の帰り際、雙峰庵老居士から、「祖元、老師からこれをお前にとの事だ。今日のご苦労さん。」と言われ、一枚の書を渡された。『透関』の二文字が書いてあった。老師の書を頂き感激したが、一枚に腰をすえた境涯とは恥ずかしいもので、白状すると、「苦労して初関を透ったのに、なぜ、『透関』なのだろう。」と、ぼかんとしていたのが事実であった。

数年後、如々庵老師の『五灯会元鈔講話』を拝読して、趙州の喫茶去の因縁に至って、私のぼんくら加減を、したたか痛感させられた。ご親切な策励を頂いても気がつかないなあって、冷汗三斗はこのことだ。師家たる方のご親切を受ける、受けないもみな修行者の打ち込み次第、境涯次第であるといえる。その老師も、今は、もうおられない。出会いということの大切なことをしみじみと感じている。不肖の弟子だが、入門以来、磨甄庵老師に参禅を聞いてもらっている。老師は90歳になられるが、私にとって、まさに爪のかけばもない、大岳峰である。若き日に市川の禅道場で目の当たりにした剣士達のように道心を燃やし打ち込まねば、申し訳が立たない。

わが師の著した『学道用心集講話』の中、道元禅師のお言葉に「……この一日の身命は、たふとぶべき身命なり。たふとぶべき形骸なり。……古聖先賢は、日月をおしみ、光陰をおしむこと、眼晴よりもおしむ、国土よりおしむ。……」とある。又、「正師を得ざるは、学ばざるに如かず」ともある。このお言葉に逢う時、唯、唯、わが身の悲しさと、幸せを噛みしめながら、牛の歩みを進めるのみである。

『胸先に黒き富士立つ秋の暮れ』 多佳子

合掌

全機現（内田ふき先生追悼特集号・平成18年11月26日）

「生也全機現 死也全機現」なんとも禅的な語である。全機とは、天地宇宙のありとあらゆる存在に、それぞれ一切の機用（はたらき）があますところなく発現している様。何時でもどこでも全機がみちている。誕生の時の大きな産声、スポーツに興じる若者の歓声などには旺盛な命のはたらきとよろこびが現れ、一方病の床に臥す病人の苦悩の姿や、死に至った骸の上には静寂の死の全きはたらきが現れている。やがて腐敗していく死の全機である。

「今、生きている時は、精一杯生きていく、臨終の時は不可抗力のまま死に徹する。生来たれば生、死来たれば死、そこには一貫して変わらない真理が働いている……」

『あけぼの13号』の巻頭、緝熙庵老禅子「禅の生死観 一生死をどう生きるか」の中にある文である。平成18年5月25日木曜日の昼、24日の夕方に慧純さんが帰寂されたとの報が、摂心中の房総道場に伝わった。「まさか！」まさに寝耳に水、大きな衝撃が走った。

月曜日には、『禅茶録』の初稿を講じ、これから順次講じていく構想を生き活きと語っていた。今夜、この場で、第2回目となる『禅茶録』の法話が聴聞できることになっていた。半信半疑で金峰庵老居士と2人で急ぎ総北五葉塾に向かった。しかし、そこにはまぎれもなく慧純さんが静かに横たわって居られた。老居士は「逝ったか！……」あとは極まって嗚咽となった。私もなにも言えずただただ涙となってしまった。そのお顔は、いつもの大禅定の御姿そのまま、お顔を拝見しているとたちまちのうちに、生即是死、死即是生の日常底を垣間見る想いがした。全機現の静寂そのままであった。

摂心厳修中のこと、その夜の通夜の段取り、支部員有志で読経すると決め、夫君智鏡居士の了解を得て葬儀は、摂心円了日27日に房総道場で追憶尋思式の形で11時より行うと決定した。老師のご指示のもと金峰庵、総務長、支部長はじめ支部あげでの準備が進められた。摂心は老師の身命を賭してのご指導と、緝熙老禅子の死の重さを正受して、真剣な骨折りをもって続けられた。ことに支部長鉄漢居士は、作務中に踵を骨折されながらも、松葉杖で陣頭に立ち、大奮闘、支部員の先頭にたって道心を振起された。

金曜日（26日）の老師ご提唱は、初心の者の為の法話を予め変更されていた。火曜日（23日）の朝、その旨を慧純さんに電話を入れ、廻光会（コミュニティセンターで活動する市民の禅サークル）関係者の参加呼びかけをお願いした。「それは良い機会ね。皆に伝えるようにしておきましょう」とのお返事を頂いていた。最後のお声になるとは夢にも思わず電話を切った。金曜日の法話には、お言葉の通りに多くの、初心、新到の方々が参加された。慧純さんは「禅の修行は正師に逢わなければ、本物の法に触れなければ、本物の警咳に接しなけれ……」と折にふれ、禅の要諦を説いておられた。